

陳舜臣さんを語る会通信

NO.53

Dec. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年12月1日

日本人青年賀望東、唐の都で事件を解く！『長安日記』

本通信第51号と52号では、“陶展文もの”と呼ばれる10作を紹介しましたが、本号では、賀望東が、唐の都で事件を解く『長安日記 賀望東事件録』を取り上げます。
(編集委員 橘雄三)

《1.『長安日記』に登場する賀望東&近しい人びと》

がぼうとう 賀望東	皇族が通う学校修文館の学生。6年前に日本からやって来た、かしこきあたりにつながる“尋常でない身分”というだけで、詳しい出自はわからない
まひとばくもん 真人莫問	賀望東の後見役、お守り役。6年前(711)の遣唐使の押使。しかし、このときの遣唐使については日本の史書にも『唐書』にも記録がない
そうも 曹茂	日本から流亡した人の子孫らしい。「東方の客」の殺人事件の共犯者ですが、賀望東が下げ受けます。恩人賀望東の手足となって働く
ようたいげい 遙大鯨	首都の治安を担当する金吾衛の役人。最初、騎曹参軍、正八品下でしたが、「見られたくない姿」では従六品上に出世しています
阿倍仲麻呂	717年の遣唐使の一員。16歳の少年留学生
しょうがい 小凱	平康坊の掬水楼の歌妓。賀望東の馴染み

《2.『長安日記』各章、初出一覧》

東方の客	「小説サンデー毎日」 1972年2月号
観燈の夜	同4月号
煙の娘	同6月号
賢人の句	同8月号
舞妓を買います	同10月号
見られたくない姿	同1973年1月号

“陶展文もの”は長編4作、中編1作、短編5作、計10作品でした。しかし、賀望東が登場するのは『長安日記』に収録された短編6作だけなのは寂しいかぎりです。陳さんは、「続編があるかもしれない」とおっしゃっていましたが、ありませんでした。

中公文庫『長安日記』キャッチコピー



玄宗皇帝の治下、国際色豊かな唐の都長安。夜の闇に影が走り、密室に人が死ぬ。次々に起る殺人事件に、謎の日本人青年賀望東の推理がひらめく。長安の街の風趣にみちた著者会心の本格的推理傑作。

賀望東は孝徳帝の子定慧がヒント
中公文庫『長安日記』「あとがき」
より抜粋引用 (傍線は編集委員)

唐のメトロポリス長安は、そこを起点として西へのびるシルクロードとともに、ひさしいあいだ私の夢であった。

小説家になってからも、そこを舞台にする作品を書くのが夢であった。十年ほど前に書いた「方壺園」という中編小説は、その夢をなだめる、最初のささやかな作業だったといえよう。

『小説サンデー毎日』に隔月連載した私のこの賀望東シリーズは、種本はなく、自由に書いたものである。

主人公の賀望東が何者なのか、彼自身にとっても謎だが、これはまだ解けていない。一応筆を

おいたが、あるいは続編があるかもしれない、という含みをもたせて、そのままにしたのである。

種本はないが、主人公の設定については、鎌足の子の定慧に関する梅原猛氏の推理がヒントになった。氏によれば、唐に留学した僧の定慧は、じつは孝徳の子で、鎌足は中大兄皇子の猜疑心を避けるために、出家させて唐へ送ったのだという。きわめてありうることで、それに似たような設定にした。

むろん、賀望東すなわち定慧ではない。定慧の死は天智四(六六五)年と伝えられており、この小説での賀望東の初登場は、霊龜三(七一七)年だから、五十年以上のひらきがある。

一九七三年一月 陳舜臣

■右、傍線、後者については次頁で補足します。



講談社『陳舜臣全集第六巻』より
一九八四年、西安で大雁塔を背に

『長安日記』 各章の導入

東方の客	開元五年(717年)、長安の都に遣唐使がやって来ます。押使多治比県守の他、一行には、16歳の少年留学生阿倍仲麻呂の顔も見えます。外国の使節を泊める鴻臚客館で殺人事件が起きます。賀望東の登場です。彼は、皇族が通う学校、修文館の学生です。6年前に日本からやって来た、かしこきあたりにつながる“尋常でない身分”というだけで、詳しい出自はわかりません	
観燈の夜	正月十五日、上元の夜は「元宵観燈」です。この夜、右街の懷遠坊で、西市で見世物小屋を出している曲明其という男が殺されます。昼間、賀望東は、阿倍仲麻呂をさそって、その見世物小屋で、美女を的に手裏剣を投げたり、短弓を射たり、吹き矢を吹く「囲美姫」という出し物を見たばかりでした	
煙の娘	賀望東にも失敗はあります。これはその失敗譚です。ある日、西市で知り合った焦成という男が、一人の娘を連れて賀望東を訪ねて来ます。娘は西市の見世物小屋、「煙の仙人」一座の座員、明珠というペルシャ娘で、「詩を教えてやってほしい」というのです。焦成は又、明珠に、経学者・金掃に経書を習わせてもいました。焦成は愛する明珠に教養をつけさせたかったのです。ある日、金掃が昇平坊の住居で死んでいるのが発見されます。医者に見立ては心臓麻痺でしたが…。続いて事件が発生します	
賢人の句	長安に顔莊という手配師がいました。少し南方訛りがある三十前後の男です。手配師とは、テレビの時代劇に出てくる「口入れ屋」のような職業です。表向きは職業紹介所ですが、裏で賭場を開いています。ドラマでも、「口入れ屋」は袖の下を渡し、町方同心に取り入ろうとしますが、賀望東の友人遙大鯨と顔莊はそんな関係です。ある日、賀望東と遙大鯨が顔莊のもてなしを受けている時、殺人事件が起ります	
舞妓を買います	賀望東の友人遙大鯨は金吾衛の騎曹参軍事です。ところが、同僚の一人が長史に昇任します。金を使って工作したに違いないと、面白くありません。そんなとき、遙大鯨に儲け話がころがりこんできます。群賢坊に王久という、商売と金貸しを業とする大富豪がいました。王久が買いに出る商品はたちまち値が上がり、天井で売って大もうけするのが彼の商売のやり方です。このところ、どうも、この買い売りの情報が外に漏れているようです。そこで、王久は甥の友人である遙大鯨に、情報を漏らす犯人を突き止めてほしいと、200両という高額な成功報酬を提示してきます	
見られたくない姿	平康坊の妓楼「掬水楼」で、賀望東と遙大鯨がおしゃべりをしているときの事です。階下から、ガチャン!ガチャン!と皿や碗のこわれる音が聞こえてきます。隠居の老大工・申舒が大暴れしているのです。おかみが申舒に「雨漏りを見てほしい」と頼んだことが、ことの発端でした。このできごとに、遙大鯨は、二十年ほど前の殺人事件を思い出します	

定慧の出自、並びに出家入唐の政治的背景
梅原猛『塔』(集英社)の記述から

鎌足の子・定慧が出家し入唐したのは、白雉四年(六五三)、定慧十一歳の時のことです。鎌足が一人息子を出家させ、唐へ送った理由は、何だったのでしょうか。これについて、上掲著、第四部「蔭のヒーロー」第一章「藤原定慧の悲劇」から抜粋引用します。

その謎をとく唯一のカギは定慧の出生にかんする噂ではないかと思う。定慧は孝徳帝の子であると、『多武峰縁起』および『略記』にいう。『縁起』においては、「定慧和尚は中臣連一男、実は天万豊日天皇の皇子なり」とあり、『略記』においてはさらに、孝徳帝は鎌足に妃を与えたが、時に妃は六ヶ月の子をはらんでいた。そして帝は鎌足に、その子が女ならば俺の子として、その子が男ならばお前の子にせよといったという。男の子が生まれて、その子が鎌足の子となったが、それが定慧であるという。

こう考えると、白雉四年に定慧が出家入唐させられた理由は、はっきり理解されるのである。つまり、この孝徳と天智の分裂の時期において、鎌足にとって、孝徳の子であるという噂のある定慧を自分の子供としてもっていることは、大へん都合が悪い。

私は定慧の出家入唐こそ、鎌足がわが子を犠牲にして、天智に忠誠を誓ったその誓いではないかと思う。ここで鎌足は、旗幟を鮮明にするのである。



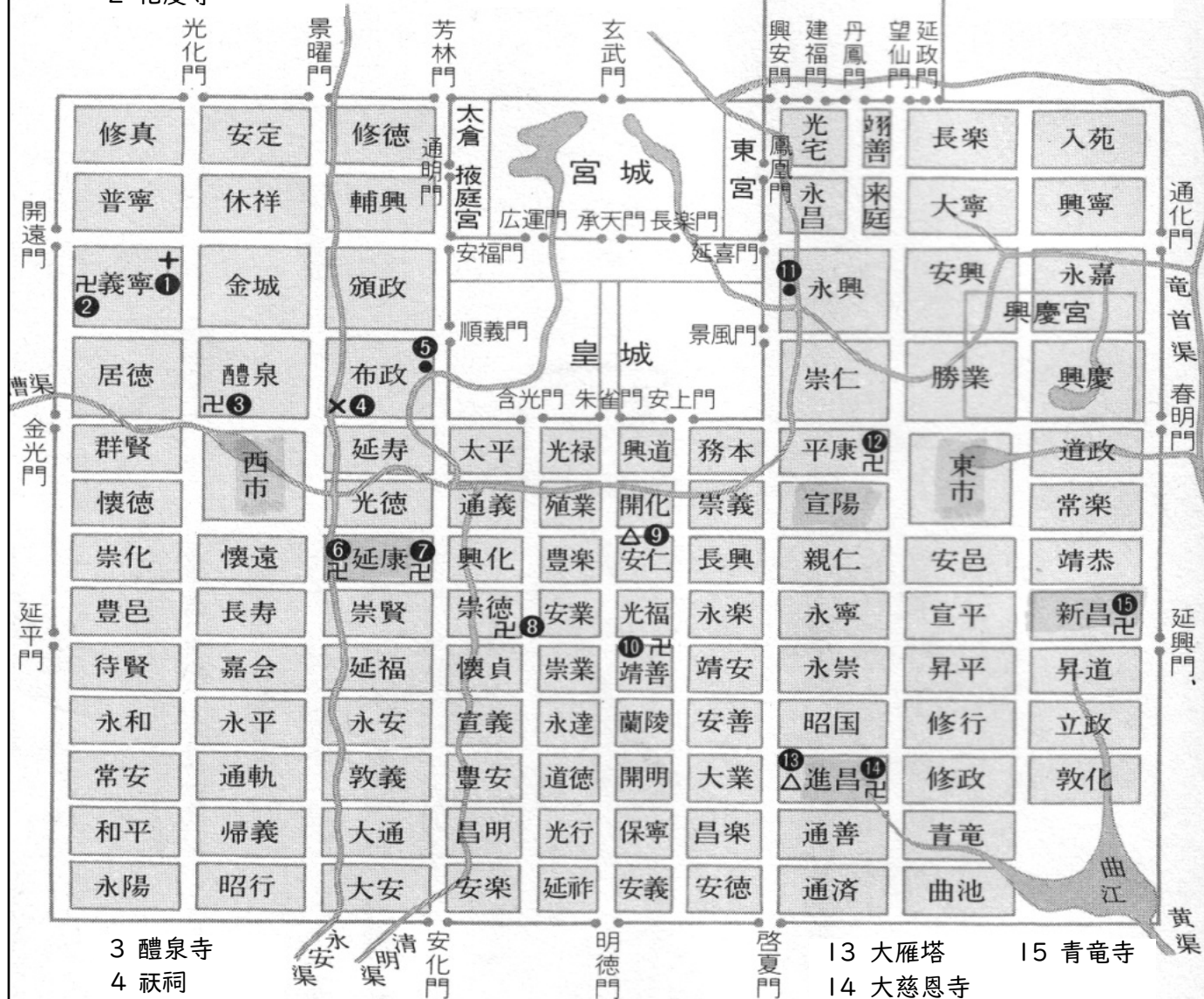
唐の都長安 地図

講談社『陳舜臣全集第六巻』より

- 1 大秦寺(波斯胡寺)
2 化度寺

- 5 右金吾衛
6 西明寺
7 静法寺
8 嵩聖寺

- 9 小雁塔
10 大興善寺
11 左金吾衛
12 菩提寺



- 3 醴泉寺
4 祆祠

- 13 大雁塔
14 大慈恩寺

- 15 青龍寺



唐の都 長安

kknews.cc/historyより

陳舜臣さんが力をいれて書こうとしたのは、賀望東を包む長安の風景であり、長安という都市そのもののものです。言いかえれば、長安という都市が主人公なのです。

『長安日記』の主人公は
長安という都市そのもの

『長安日記』には、右のような記述が複数回出てきます。賀望東は、陳さんご自身ではないでしょうか。

(おれは何者なのか?)
たえずこの問題に取り組んでいる賀望東は、いつのまにか、推理力をとぎすまして、難問を解決するようになったのです。(中公文庫『長安日記』p.92)

(おれはいったい何者なのか?)と
己に問いかける賀望東は陳舜臣さん自身?
賀望東とは、いったい何者でしょうか。
じつは、彼自身がそれを知らないのです。
自分が何者であるかわからない。ーこんな哀しいことが世の中にあつていいものでしょうか。
(中公文庫『長安日記』p.32)

唐の都長安を舞台にした最初の作品「方壺園」^{ほうこえん}

陳舜臣さんは、1961年、『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞し、作家生活をスタートします。翌年、書き下ろしで『三色の家』（講談社 4月）、続いて『弓の部屋』（東都書房 7月）を刊行しますが、ほぼ同時期、『小説中央公論』7月号に「方壺園」を書いています。短篇集『方壺園』の刊行は11月（中央公論社）です。「方壺園」は文庫本で50数ページの中編小説です。

陳舜臣さんは、中公文庫『長安日記』『あとがき』で、

小説家になってからも、そこ（*長安）を舞台にする作品を書くのが夢であった。十年ほど前に書いた「方壺園」という中編小説は、その夢をなだめる、最初のささやかな作業だったといえよう。

とおっしゃっています。（上の文中、*は編集委員の補足です。）

（編集委員 橘雄三）

「方壺園」キャッチコピー

唐の都長安、豪商・崔朝宏の邸内にある「方壺園」で、詩人・高佐庭が殺される。内側から門がかった状態で、殺人事件に役人もさじを投げる。その翌年、同じ方壺園で縊死死体が見つかる。ストーリーは李賀の詩の盗作や崔朝宏の不老長寿薬が絡み展開する。虚栄と嫉妬が起こした事件の真相は…。



中公文庫版表紙

主な登場人物 ネタバレにならない程度に

● 崔朝宏（さいちようこう） 昌明坊に大邸宅を構える豪商。貧家の出だが、塩商として長安屈指の富翁となる。不老長寿の薬、仙丹を練り試飲服用している。

● 高佐庭（こうさてい） 崔家の居候。父が官にあったとき、崔朝宏に非常な便宜をはかったので、朝宏は恩人の子として遇して

いる。二十七、八歳。李賀の友人、詩人。李賀の全集刊行を企図し、遺稿を錦囊に入れて持ち歩いている。文名すてに高い。

● 李標（りひょう） 李賀の従弟。崔朝宏邸に住み込み、竹かご編みを仕事としている。自分は字が読めず、豊かな才能を持った従兄・李賀に対し屈折した感情を持つ。

● 呉炎（ごえん） 崔朝宏邸の食客。洛陽豪門の子弟。受験のため長安に滞在。翠環を垣間見て、その虜となる。

● 翠環（すいかん） 平康坊南曲、胡人の血をひく歌妓。詩人歌妓と呼ばれ、詩がでる客しか相手にしない。

● 杜牧（とぼく） 李賀の友人。高佐庭亡き後、李賀の遺稿を刊行したいと、李標を訪ねてくる。この、杜牧の訪問が第二の殺人事件の引き金となる。

中公文庫『方壺園』収録作品

『宝石』昭和38年9月号、「ある作家の周囲―陳舜臣篇」の「自作を語る」から。

「方壺園」

唐の詩人李賀にまつわるエピソードのいくつかを、わたしなりにミステリーふうに変換させた。私は李賀の鬼才に傾倒している。

「大南堂」

舞台は清末。「天外消失」に似た場所というので、万をかぞえる独房の並んだ貢院（科擧の試験場）を使おうとしたが、

そこは明遠楼や瞭楼が目じるしになるので、兵舎にかえた。

「九雷溪」

福建で処刑された瞿秋白の最期を、私なりに想像を駆って書いた。小説家の生命は、イマジネーションにあると私は考えている。（刑場に向かう瞿秋白）



「梨の花」

私の玩古癖から出た作品。ペダンチックにすぎたかもしれない。

「アルバムより」

なんとなく好きな作品の一つ。自分でトリックの実験をした。まえに私が大成しないと宣告した先生が、またこれを駄作ときめつけた。しかし批評文中の梗概説明は私の小説とちがっている。ろくに読んでいない証拠だ。批評するからには、ちゃんと読まねば、作家に対して非礼であろう。

「獣心図」

インドのムガル王朝の歴史からとった。史実八割、フィクション二割。むかし勉強した題材だけに、力がこもった。日本の読者にはなじめない舞台かも知れないが、私の好きな作品の一つ。